

目次

はじめに

「気持ち・感情・感覚」の言語化

雨の日は外に出られないからお家で遊ぶ…外と内

人間にかかわること、かわらないこと

反対側、裏側での表現

8

第一章 気持ち・感情・感覚の言語表現

気持ちと感情

気持ち・感情と身体性

桐野夏生『O U T』にみる「感情」の発生

夏目漱石「彼岸過迄」の「探偵」

33

不安定な大正時代

「こ」とがら情報」と「感覚情報」

第二章 文学作品の「鬱屈」

夏目漱石「道草」

佐藤春夫「田園の憂鬱」

宮地嘉六「煤煙の臭ひ」

中戸川吉二『反射する心』

芥川龍之介の作品群

57

第三章 辞書に載せられた鬱屈した「気持ち・感情」

『ポケット顧問 や・此は便利だ』

『新らしい言葉の字引』

室生犀星の「モダン日本辞典」

123

第四章 詩的言語にあらわれた「鬱屈」

「気持ち・感情」を言語化する

災後の詩的言語

萩原朔太郎 『月に吠える』 郷愁から生理的の恐怖感、そして苦惱へ

山村暮鳥 『聖三稜玻璃』 で使われている語

関東大震災後の言語空間

『憶東京 詩・散文』

『震災詩集 災禍の上に』

東京市編纂 『詩集 市民の歌へる』

アララギ発行所編大正十二年震災歌集 『灰燼集』

増田乙四郎詠著 『大正激震猛火の新体詩』

「器」としての詩・短歌・新体詩

第五章 二〇二〇年～二〇二二年の「鬱屈」

新型コロナウイルスと言語表現

ウクライナ戦争と言語表現

「気持ち・感情」の言語化をめぐる

おわりに

凡例

- 一、引用にあたって、漢字字体は、常用漢字表に当該漢字が載せられている場合には、その字体を使い、載せられていない場合は、適宜判断した。
- 一、引用文中、かなづかいは現代仮名遣いにし、促音・拗音にあてられている「つ」「や」「ゆ」「よ」は小書きにした。また、振仮名のかなづかいても現代仮名遣いにし、繰り返し符号は適宜、仮名に置き換えた。
- 一、引用文中の傍線は引用者、傍点は原文による。
- 一、引用には一部、今日の人権意識に照らして不適切な表現があるが、原典の時代性に鑑み、原文のままとした。
- 一、「ユウダチ」のように、片仮名で書き、一重鉤括弧に入っている場合は、「ユウダチ」という語そのものをあらわしている。この表示では、当該語がわかりにくい場合は、丸括弧に漢字列を入れて、「ユウダチ（夕立）」と示す。

はじめに

本書は『鬱屈』の時代をよむ』をタイトルにした。

令和二（二〇二〇）年二月三日に、横浜港に停泊した大型クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」で新型コロナウイルスの検疫が行なわれた。この新型コロナウイルスに対応する専門家の組織として厚生労働省内に「アドバイザリーボード」が設置され、第一回の会合が二月七日、第二回が二月十日に開かれている。この原稿を書いている令和四（二〇二二）年九月十五日の『朝日新聞』によれば、九月十四日の、午後七時半時点で確認されている新型コロナウイルスの国内の新規感染者は十万二七七人で、感染者の累計は二〇四一万四七六二人、死者は一八四人が新たに確認され、その累計は四万三二一人になっている。その一方で、感染者の「全数把握」は、九月二十六日以降は行なわないことになった。新型コロナウイルスの感染が終息しない状況のもと、二年半以上日常生活を送ってきた。

たことになる。

令和四年二月二十四日にはロシアがウクライナに侵攻し、「ウクライナ戦争」が始まった。侵攻の様子が毎日のようにテレビで報道され、「専門家」が軍事作戦についてテレビで語る日々が続いた。

新型コロナウイルスのような感染症が大流行したことは過去にもあり、またいろいろな規模で、戦争が繰り返されてきた。疾病の他にも地震や台風、大雨による自然災害もある。そうした事態に遭遇した時、人は平静ではいられない。いろいろな感情がわきあがり、いろいろな気持ちになる。人は自身の気持ち、感情と向き合い、他者の気持ち、感情と向き合って生きていかなければいけない。

いろいろな「気持ち」「感情」がある中で、はつらつ潑刺とした気持ちや、喜びという感情ではなく、不安な気持ち、憂鬱な気持ち、鬱屈した気持ちや感情などに焦点を絞り、そうした気持ちや感情がどのように言語化されてきたかを「よむ」ことをテーマとしたのが本書だ。「言語化されてきたか」と述べたが、うまく言語化されない場合もあるだろう。それをも含めて「言語化された気持ち・感情」について考えてみたい。

ここで筆者の考えているモデルを紹介しておきたい。本書も、このモデルに基づいて述べていくことにする。その言語を書きあらわすための文字をもっている言語には「はなしことば」と「書きことば」とがある。本書の観察対象は「書きことば」である。ただし、つねに「はなしことば」「書きことば」両方を視野に入れておきたい。「はなしことば」であれば、「話し手」と「聞き手」、「書きことば」であれば、「書き手」と「読み手」を想定することができる。「話し手」「書き手」を情報の「発信者」ととらえ、「聞き手」「読み手」を「受信者」ととらえて、「発信者／受信者」という表現を使うことにする。

情報の発信者の脳内には、他者に伝えたい「情報」があるとまず考える。この「情報」は最初かたちをもっていないと前提しておく。そう前提すると「かたち」を与えるためのなんらかのプロセスがあることになる。

言語によってこの「情報」にかたちを与えるプロセスを「言語化」と呼ぶことにしよう。そうすると視覚でとらえることができる映像によってこの「情報」にかたちを与えるプロセスは「視覚化（映像化）」ということになる。「言語化」も「視覚化」の一つであるともみることができ、今ここでは、両者は別のプロセスと考えることにする。「視覚化」も、

(現代はいろいろな方法があるが) かつての絵画作品のように「手で描く」場合と、写真や映画のようになんらかの機材を使う場合とに分けることができる。映画が言語と無縁ということではない。絵画や写真と言語とのかかわりは、むしろ濃密で、「絵画・写真・言語」のかかわりについて考えることは一つの大きなテーマとなるが、今回は「言語化」に絞って話を進めていきたい。